幼少期の野菜・果物摂取に関連する胎児期・乳児期の要因

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2016-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 公美, 三宅, 吉博, 佐々木, 敏, 田中, 景子, 廣田, 良夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/2984

DOHaD 研究（ISSN 2187-2597）
2015 年 第 4 巻 第 1 号　110 頁

幼少期の野菜・果物摂取に関連する胎児期・乳児期の要因

大久保公美[1]、三宅吉博[2]、佐々木敏[3]、田中景子[2]、廣田良夫[4]、

1. 国立保健医療科学院、2. 愛媛大学大学院医学系研究科　3.東京大学大学院医学系研究科、4. 医療法人相生会 臨床疫学研究センター

【背景・目的】

幼少期に形成された野菜・果物の摂取が多い食習慣は、成人期にも移行しやすく、さらに生涯にわたってさまざまな健康リスクの予防に有用な効果があることが示されている。しかし、世界的に共通して子どもの野菜・果物の摂取量は各国の推奨量を下回っている。そのため、幼少期の野菜・果物摂取に影響を及ぼす変容可能な要因を明らかにすることは、生涯を通じた生活習慣病予防の観点から重要である。本研究では、離乳完了期の子どもの野菜・果物摂取に関連する胎児期・乳児期の要因を明らかにすることを目的とした。

【対象・方法】

大阪府寝屋川市ならびにその近隣地域に居住する日本人妊娠女性を対象とした出生前開始二世代継続前向きコホート研究（大阪母子保健研究）参加者 1002 名（15-43 歳）のうち、ベースライン調査、第 1 回（生後 2-9 か月時）ならびに第 2 回追跡調査（生後 16-24 か月時）に参加した母子 763 組を解析対象とした。食事と生活習慣に関する 4 種類の自記式質問票より、妊娠中の母親の食事、生活習慣、社会経済状況、母乳期間、離乳食開始時期、16-24 か月時における子どもの野菜ならびに果物の摂取頻度に関する情報を得た。そして、幼少期の野菜・果物摂取に及ぼす各要因との関連を検討するために、ロジスティック回帰分析を用いて、16-24 か月の野菜・果物の各摂取頻度が 1 日 1 回未満となるオッズ比（95%信頼区間）を算出した。

【結果】

母親の学歴が高く（オッズ比 0.34、95%信頼区間 0.18-0.61）、妊娠中の母親の野菜摂取量が多く（オッズ比 0.65、95%信頼区間 0.55-0.78）、そして母乳摂取の合計期間が 6 か月以上(オッズ比 0.53、95%信頼区間 0.34-0.84)の子どもは、16-24 か月時の野菜摂取が 1 日 1 回未満となるリスクが有意に低かった。この関連は、検討した他の要因の影響を調整しても変わらなかった。また果物摂取との関連について検討したところ、母親の年齢が高く、高学歴、高年収、ならびに妊娠中の果物摂取量が多い母親をもつ子どもは、16-24 か月時の果物の低摂取リスクが有意に低かった。

【結論】

乳児期における 6 か月以上の母乳摂取は、幼少期の野菜の低摂取予防に寄与することが示唆されたと同時に、母親の学歴、妊娠中の野菜・果物摂取は、子どもの野菜・果物摂取に関連する重要な共通要因であることが明らかとなった。